



かなであん

249-0002 逗子市山の根1-7-24

Tel : 046-871-1863 Fax : 046-872-3485

[http:// kanadean.net](http://kanadean.net)

mail: ryukeiji@kanadean.net

本願の慈悲

浄土真宗に会う

浄土真宗を開かれた親鸞聖人は、承安三年五月、京都の日野の里で誕生されたと伝わっています。同じ季節の日野の里は、新緑と色とりどりのツツジが美しく、幼くしてご両親と死別された聖人でしたが、この清々しさの中にお生れになった聖人の誕生をご両親がどれだけ喜ばれたことかと偲ばれます。

* * *

浄土真宗の宗祖・親鸞聖人は、「御開山さま」と親しみを込めて呼ばれ、浄土真宗の歴史が築かれてきました。そのご本山・本願寺は世界遺産に登録され、これまで重要文化財指定だった阿弥陀堂、御影堂が国宝になるとの報道も出ています。しかし、本願寺派の正式な名称を「久遠実成阿弥陀仏本願寺」と言い、阿弥陀仏と久遠に実際に仏と成った阿弥陀仏の本願のお寺という意味であるということに立ち戻るとき、そこは信心のよりどころとして築き護ってきてくださったお念仏の場であって、単なる歴史、物見遊山の観光資源だけになってしまわぬよう、それを支えてきた親鸞聖人のお念仏のみ教えに恵まれたご恩を忘れてはなりません。

「ご開山さま」と呼びしてきたのは、み教えを説いて下さった親鸞聖人ご自身が、阿弥陀仏の本願のお慈悲を喜び信じてお念仏の生活を貫かれた、その姿勢（生き方）を慕うお念仏の仲間（同朋）の敬いと親しみがこもったものなのです。

* * *

浄土真宗の根幹は、阿弥陀仏の本願に会うということです。阿弥陀仏の本願「一切衆生の救済」は、仏の慈悲心から生まれ、その願いの成就宣言が「南無阿弥陀仏」の名号になって至り届けられ、久遠の仏の願いが今私にはたらきかけて下さっているのです。親鸞聖人はそのおはたらきを、

**弥陀の五劫思惟の願をよく
よく案ずれば、ひとへに
親鸞一人がためなりけり。
さればそれほどの業を
もちける身にてありけるを、
たすけんとおぼしめしたち
ける本願のかたじけなさよ。**

と喜ばれたと、弟子の唯円は『歎異抄』に上記のように書き示しています。

申すまでもなく、「親鸞一人がため」というのは自分だけのものという意味ではありません。仏の慈悲が、この私、親鸞を救うために法蔵菩薩が成仏して阿弥陀仏となられ、一切衆生を迎え入れるお浄土を建立させ、仏に

なる条件など何一つ備えていない私まで救いたいと誓い、願って下さる。何とありがたく、もつたいないこと、と受け止め喜ばれたのです。仏教で「救い」といわれているのは「仏になること」なのです。仏になるとは、本来仏になれるような状態ではない自分が仏にならせていただくということです。

阿弥陀仏のおはたらきというのは、欲望を叶えたり、歩けなかった人を歩かせたりという行為ではありません。阿弥陀仏のはたらきとは、お説教（教えを説く）なのです。親鸞聖人は、師・法然上人からその教えを聞いて、他力のお念仏のみ教えに任せる日暮らしを、たとえ騙されて地獄に墜ちても後悔はないとまで貫かれ、今日、私たちにまで至り届いたのです。

すべての人が救われ、共に幸せにならなければならないと願うならば、この世でいがみあっていることの空しさに気づかなければなりません。御同朋御同行というのは、親鸞聖人と同じみ教えにつながる人々に敬語をつけたお念仏の仲間のことです。生かされて生きるという道と同じくする者同士、手をつないでいくのは当然のことでしょう。今一度、正しい浄土真宗のみ教えに遇っていただきたいと願っています。 合掌

日々是修行

【老いることの豊かさ】

私たちの体は、一生の間にゆっくり朽ちてゆく。これはつらいことだ。若い肉体のままいたいと望んでも、そんなわがままは通用しない。人の体が年とともに衰えていくのは、避け難い人生の苦しみである。ならば心はどうか。心も、体と同じように衰えていくのだろうか。確かに認知症など、脳に様々な不都合が起こってくる可能性は高まる。しかしそれも、脳という「肉体」の老いである。私が言いたいのは、「脳も含めた肉体の器官は年とともに衰えるが、心はどうなるのか」という問題である。老人の心は、若者よりも弱いのだろうか。年をとれば、残りの寿命は減る。体は衰え、記憶も薄れ、背後から死の薄闇が忍び寄る。しかしだからこそ、年をとった人は、その切ない状況を、わが身のこととして確実に感じることができる。年をとった人には、元気がつつな青少年には分からない「人生の基本的な苦しみ」をおのずから感得する力が生まれてくる。肉体が衰えていくからこそ、そこに宿る心には、生きることの本質を見通す洞察と、そこから生まれる他者に対する深い優しさが備わってくる。それは、年をとることのなよりの恩恵である。

(佐々木閑著より)

奏庵法座

【降誕会】

日時
5月26日(月)
午前11時～

「真宗宗歌」

正信偈

法話

ご文章拝読

「恩徳讃」

～*～

おとき

気候が定まらないのがこの時季の風情です。外ずすことが多い割に「折りたたみ傘を……、1枚羽織るものを……」とおせっかいな天気予報より、長く生きてきた肌感覚の確かさ、寒暖の差もまたお味じわいです。

5月は親鸞聖人ご誕生の勝縁を喜ぶご法座です。

どうぞお参り下さい。



幾多の犠牲と敗戦の焦土から立ち上がり、経済発展と復興を成し遂げた日本だが、戦争を知らない国民がほとんどとなった今もトラウマの棘は抜けきることはない。刺さったままのその不快感が、“戦後レジームからの脱却”なのだろうが、憲法解釈変更による「集団的自衛権」から波及していこう不安は計り知れない。

■美しく聞こえる「平和」という言葉だが、「争い」あって生まれた言葉、「平和」を語ることは「戦争」を語っているのだと心するべきだ。「平和」は相手(敵)あってのものであり、残念ながら自然には実現せず、一国がいくら叫んでも達成はできないものであることは確かだが、それでも諦めず共存する道を探り続けることは、かけがえのない生命体の地球を共有させてもらい君臨してきた人類の責任であり義務だろう。

■今も昔も違う形で争いを繰り返している人類だが、これだけ情報が行き交い、世界が狭くなった時代において、我が領土、我が海域、我が資源を脅かすものには武力も辞さないという論理がまかり通るのは、いかに時代に、また未来に則していないということに、何故思いがいかないのだろう。どちらが優秀か、強いかなどという価値観を振り回すことこそ、逆に弱さを見せているようなものだ。こんな愚行を繰り返すようでは、この地球上の生物の長で在り続けることが出来なくなる時が来るだろう時を、他の生物たちに黙って見つめられているような気がする。

■人類の違いや国民性は、好き嫌いもあり、時に誤解も生むだろう。しかし、地球生物共通の利害はそれの何百倍も大きいはずだ。かって、モザイクの国といわれるカナダに暮らした経験からわかったことは、混じったり、薄れたりしても、各人類固有のバックボーンは完全に無くしてしまうことはないということだ。同じ任務に就いても、それぞれの血が処し方の違いになって出る。それを忍耐して許して国が成り立っている。

■感情や幻想ではない、諂うのでもない。現実的な互いの共通の好むことを重視し、共通の嫌なことを除いていく答えを見つけていくのが日本人に流れる血であり、この他に合理的で明快な「平和=争いを避ける」道はないと思う。 Norimaru